慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	他者の記憶への回路：目取真俊『伝令兵』を読む(ということ)
Sub Title	Open a circuit to the memory of others : on reading of Denreihei by Shun Medoruma
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.117 (2007. 3) ,p.13- 35
JaLC DOI	
Abstract	What is the capacity of literary text to transmit the memory of wartime? We make an inquiry of the question through reading a short novel written by Shun Medoruma: Denreihei (Messenger). To present the memory of battlefield evoked vividly even now in Okinawa, this novel makes appear a ghost of a young soldier killed in war, the head brown off probably by a shellburst. On the one hand, this figure functions as an allegory suggesting political situations imposed on Okinawa. On the other hand, it produces the reality effect (effet de reel) and demands readers to conceive in imagination the experiences of the personages. It is through the literary effects that the text opens a circuit to the memory of others.
Notes	特集記憶の社会学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000117-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

他者の記憶への回路

——目取真俊『伝令兵』を読む（ということ）——

鈴　木　智　之*

Open a circuit to the memory of others: on reading of *Denreihei* by Shun Medoruma

Tomoyuki Suzuki

What is the capacity of literary text to transmit the memory of wartime? We make an inquiry of the question through reading a short novel written by Shun Medoruma: *Denreihei* (*Messenger*). To present the memory of battlefield evoked vividly even now in Okinawa, this novel makes appear a ghost of a young soldier killed in war, the head brown off probably by a shellburst. On the one hand, this figure functions as an allegory suggesting political situations imposed on Okinawa. On the other hand, it produces the reality effect (effet de réel) and demands readers to conceive in imagination the experiences of the personages. It is through the literary effects that the text opens a circuit to the memory of others.

* 法政大学社会学部

知るためには自分で想像しなければならない.
(G. ディディ＝ユベルマン『イメージ，それでもなお』)

1. 問題の設定

戦場の記憶を語り伝え，語り継ごうとする諸実践の中で，文学は何をしようとしているのか．あるいは，さしあたり一読者でしかない「私」の視点に立つとすれば，文学作品を読むという営みの中で，どのような記憶の分有が可能になるのか.

これは，沖縄の現代文学に関心をもち，諸作品を読み進めていく中で，「私」たちが否応なくつきあたるひとつの問いである．テクストを読む中で，さらには沖縄を訪ねて人々と言葉を交わしていく中で，この地では戦場の経験の痕跡がなおも濃密な現実感とともに生きられているという事実を，折に触れて思い知らされる．それが語られるにせよ，いまだ語りえぬ出来事として胸のうちに秘められているにせよ，「沖縄戦」はまさに「過ぎ去ろうとしない過去」として今この場にある，と.

しかしまたそれだけに，戦場の記憶をいかに受け止めることができるのかという問いが，「私」にとっては，ある種の距離の感覚とともに主題化されざるをえない．その距離は，戦時と現在との時間的隔たりによって生じるのではなく，自己と他者の生きるリアリティの隔たりとして経験されるものである．問題はおそらく「記憶の風化」そのものにあるのではなく，記憶された経験を「私」たちがみずからの生活の文脈の中で聴き取る，その身構えを見いだしうるか否かにある．記憶は濃密な現実感をもって生きられているように見える．にもかかわらず，それは「私」の生きている現実からは隔てられている.「すぐそこにある」ものとして感受されながら，何がしかの媒体を介した形でしか認識されえない．そうしたものとして目前に現れた「過去」に，「私」たちはどのような関わりを結ぶことができるのだろうか.

この問題を，ここでは，文学作品の読み手の視点から捉え直してみようと思う．沖縄戦の記憶を語り伝えようとする諸言説の中には，小説や詩，あるいは戯曲といった形式をとるテクストが相当のウェイトを占め，大きな厚みをもって蓄積されている．これらの「作品」を読むことによって，「私」は，戦場の記憶について何を認識し，経験しうるのか．これが本稿の中心的な検討課題となる．

2. 文学的身構え

問題をこのように文学的コミュニケーションの場面に絞り込むということは，記憶の伝達をあえて，限られた特殊な回路において主題化することに他ならない．しかし，その限定を通じて，「語る（書く）―聴く（読む）」という行為を，抽象的な関係としてではなく，特異な形で構造化される「場 champ」の内部でのコミュニケーションとして，言い換えれば，特定の「制度 institution」に媒介された意味生産の過程として検討することができるようになるだろう．「文学」もまた，その他の様々な制度と並んで，「記憶の場所 lieu de mémoire」(Nora 1984) を構成する．その中で，記憶を語る言葉は「作品」として組織され，これによって，新たな伝達の可能性と，その反面における限界とを生じさせる．「読む」という行為は，この両義的な条件下での，経験の分有を賭けたひとつの企てとなる．

では，与えられた言葉を「文学」として読むとはどのような事態なのだろうか．

ここで，その特性を網羅的に検討することはできそうにない．しかし，少なくともそこには，テクストに対するいくつかの特異な身構えが（必ずしもそのすべてを必要条件としない形で）生じている．この「文学的」な読み手の態度として，例えば，テクスト内容の「虚構性」の承認や，その「形式性」の前景化が挙げられる．作品を「虚構」のものとして読むとい

う「契約」――「フィクション契約」――を結び，外在的な現実に参照して内容の真偽を問うという作業を回避する姿勢．あるいは，語られた内容とその語り方とを切り離して，テクストの「形式」を評価の対象にすえる姿勢――「フォルマリスト契約」とでも呼べるだろうか．こうした独特の身構えのもとで，テクストは狭義の「文学性」を獲得し，「読書」は他の諸言説のそれから切り離された固有の現実領域を構成する．

ただし，こうした「文学性」は読者による一方的な構築物としてあるのではなく，そうした読みをうながす諸特性がテクスト（およびパラテクスト）の側に準備されてはじめて可能になる．したがって，読者の視点から見れば，テクストをあえて「文学的に読んでいる」のではなく，多くの場合には，対象そのものが「文学的なものとして現れてくる」のである．テクストが「文学的」であるか否かは，G. ジュネットが論じたように，テクストに内在する要因によって「本質的」に決まっているのではなく，「条件的依存的」に変化していくものであるが (Genette 1991), その条件はテクストと読者の相互的な関係の中で生み出される．

さてこの時，読者の「文学的身構え」を特徴づけるもうひとつの傾向として，テクストが解釈に対して「開かれている」ことへの期待，を挙げておかねばならない．潜在的には，すべての言語（記号）テクストは，意味理解の変更可能性をともなっており，その限りにおいて常に「開かれている」．しかし，それゆえにまた，多くの社会的場面では，共有されたコードや確立された審級によって解釈が統制され，意味の揺らぎを食い止めることが期待されている．しかし，文学――とりわけ現代（モダン）の文学――においては，テクストの発するメッセージが一義的に固定されておらず，読者による解釈に依存して変化していくことが，むしろ好ましい事態として求められている（もちろん「文学テクスト」についても，読み方を管理する制度的なプロセスが存在する．しかし，すでに正統化された読み方への抵抗もまた，その制度によって承認され，推奨される行為の形なのである）．

U. エーコ (Eco 1968＝1997) とともにこの側面を強調すれば，「作品」とは「単一の意味表現（シニフィアン）」の中に「複数の意味内容（シニフィエ）」を共生させるものだ，と言うことができる．それは，単一の正しい「読み」を想定するのではなく，「解釈者によって享受されるその瞬間に完成される」ものである．ただしここでも，「解釈者に委ねられた様々な組織化の可能性」(ibid.: 36) は，読者の側の一方的な「自由」によってもたされるのではなく，「意味」を不確定なものとして提示するテクストと，新しい視点を模索する読者との相互作用の中で生まれる．したがって「作品」は，「解釈の変動と視点の移動を許容し協働させる，確定的な構造特性を備えた対象」(ibid.: 12) として，読み手の前に現れてくることになる．

もちろん「私」たちは，「文学作品」として提示されたすべてのテクストについて，常に複数の，新たな「解釈」を産出しうるわけではない．しかし，その読解の過程において，新たな「意味」の生成が潜在的に可能であると予期されているならば，それだけ「読むという経験」が「文学的」な質を獲得することになる．この「開放的な意味生産」を可能にするコミュニケーションの場として，あるいは「開かれた」作品の出現が期待される場として，文学は組織されている．その場において作品に相対する時，「私」たちは，テクストに突き動かされながら，絶えず別様の読み方を探し求めることになるだろう．

「虚構性」の受容と「形式性」への照準化に加えて，「開放性」への期待．「文学テクスト」を前にした読者に特徴的な身構えを，ひとまずはこの三つの側面において把握しておこう．

しかし，他方においては，「私」たちが「文学作品」を常に，純粋に「文学的」にのみ読んでいるわけではないということにも留意しておかねばならない．「虚構」の物語に新たな解釈をほどこし，その「修辞的な技法」を鑑賞するような読み方を進めながらも，読者はそれが何らかの「現

実」を語ろうとしていること，あるいはその現実に対する「政治的」ないし「道徳的」なメッセージを伝えようとしていることを認めている．多くの場合には，テクストの（狭義の）「文学性」に志向した読み方と，その「社会性」や「政治性」に照準化した読み方とが共存し，常に一定の緊張関係を呼び起こしながら，相互規定的な関係に立っている．したがって，この二つの側面の関係を明確化することが，「文学テクスト」の「読み」を記述するひとつの方法となりうる．

この時，テクストがその「文学性」において発揮する意味作用と，社会・歴史的現実を指示する作用とは，相対的に自律的でありながらも，完全に切り離された形で別次元に生じるわけではない．多くの論者が証言するように，「文学テクスト」は，その「形式」を通じて，「虚構化」の中で，あるいはその「開かれた」解釈可能性の中でこそ，「現実を語る」ものとなる．

例えば，J. デュボアは，文学のテクストが「社会の真実を語り」うるのは「小説的なるものそれ自体，その想像的なるものそれ自体，その文学的表現ないし詩的表現それ自体によっている」(Dubois 2000＝2005: 4) のだと主張する．「テクストは，ひとつの世界を作りあげ，人間関係を寓意すれすれのところへと投影することによって，さらにはごく世俗的な言葉をとりこんで言語的な人工物へと組みかえることによって，社会の解釈のためのきわめて操作的で，洞察力に富んだ枠組みを提示する」(ibid.: 5) のである．

「芸術」とは「開かれた」形式をもって素材を構造化する一様態であると規定するエーコも，「芸術作品」が「世界についての言述を生み，みずからの母胎である歴史に反応し，歴史を解釈し，評価し，そこで企図を立てる」とすれば，それは「この形成様態を通してのみ可能となる」のだと言う．したがって，「作品を形成様態として検討することによってはじめて (…), 作品特有の相貌を通じて作品の母胎である歴史を再発見すること

が可能になる」(op.cit.: 27).

「記憶」をめぐる語りについても，同様の主張がなされる．例えば，C. ダーナは，A. カミュの『ペスト』やG. ペレックの『Wあるいは子供の頃の思い出』を素材として，「フィクション」が「ショアの記憶」の構成に占める固有の役割を検証している．その中で彼女は，「記憶」が「現在における『生き生きとした経験』であり続ける」ためにこそ，「文学表象」が必要とされるのだと訴える．

> ジェノサイドの文学表象は(…)，ナチスによる虐殺についての一切の認識と一切の判断——事実上，それについて想像されうるすべてのもの——が，それを通じて可能となるレンズであり，それなくしては，個人的経験も記憶も不充分なものとなってしまうだろう．ジェノサイドが——一民族の消失としても，それを消滅させようとした行為としても——「取り消し不能」のものとなるためには，芸術作品が必要となるのだ．(Dana 1998: 13)

「アウシュヴィッツのあとで詩を書くことは可能か」というアドルノの問いに答えて，あるいは「フィクションは根本的な嘘であり，道徳的犯罪であり，記憶の殺害者である」と断言するC. ランズマンに抗して，虚構の文学形式こそが，記憶の語り継ぎにおいて不可欠であると，ダーナは主張する．もちろん私たちは，他のすべての形式を凌駕するような特権的な位置に「文学」を祭りあげる必要はない．しかし，それがひとつの可能な形式であるということ，そしてその可能性はテクストを作品化する様式に媒介されるのだという視点を，彼女と共有しておくことにしよう．

テクストを「文学的に読む」ということと，そのテクストを通じて他者の「経験」や「現実」に触れようとするふるまいの間には，容易に解消しがたい溝がある．にもかかわらず，「作品」によって「記憶」が語り伝え

られるとすれば，それは「テクスト」の「文学性」を介して，またはその「文学性」との交渉を通じてのことである．では，「文学テクスト」を読むということが，いかにして他者の経験についての認識の手段となりうるのか．ここからは，沖縄で書かれた一篇の小説作品をとりあげ，その読解の中でこれを考えてみよう．

3. 『伝令兵』というテクスト

ここで検討の対象に置かれるのは，『伝令兵』と題された作品である．発表されたのは，『群像』の 2004 年 10 月号．最初のページの右肩に「短編小説」とジャンルが明示されている．作者名は，目取真俊とある．

こうしたパラテクスチュアルな諸要素は，このテクストを，「私」たちの前に「文学作品」として提示している．そして，以下に見る書き出しの一節もまた，あらかじめ読者に植えつけられた期待——これは「小説」であるという期待——を裏切るものではない．

> アパートの階段を下りると，金城は駐車場で足首を回し，膝の屈伸を行った．夜の街を走るのは久し振りだった．勤めている塾の仕事が終わるのは夜の十時過ぎで，外食して帰るとアパートに戻るのは十一時を回る．食事がてら酒を飲むと一時を過ぎることもざらだった．三十代半ば，独り暮らしでそういう生活をしていれば，体がどうなるかは明らかだった．
>
> 「お前，だいぶ変わったな」
>
> 金城が勤め始めた五年前を思い出しながらというように，塾長の前里がしみじみとした口調で言った．余計なお世話だよと，と胸の中でつぶやいたが，職場の体重計で測ると体脂肪が三十パーセントを上回っている．(44)

日常の一断面を切り出すように語るこの一節は，明らかに「日記」とも「ルポルタージュ」とも異なる文体で書かれている．抑制された三人称の記述．その中に組み込まれる「視点人物」の内言．行為を呼び起こすための状況設定．それらは，このテクストが「私」たちにとってはおなじみの「小説」という形式で書かれていることを示す．

しかしながら，このテクストを読むという経験の中には，その「文学的」な体裁との齟齬を予感させるような，ある種の緊張が喚起される．「私」たちはこれを，単純に「虚構」の物語として受容し，その「形式」を楽しんでいればよい，というわけにはいかないのだと感じ始める．それは，テクストを「文学作品」として構成するための装置――「文学作品」として読むことを可能にする仕掛け――が，文脈――物語のそれと読み手の置かれている状況――との相互作用によって，「文学的な身構え」とは別様の態度を同時に呼び起こしていくからである．そして，結論を先回りして言うならば，そこに惹き起こされる緊張関係の中にこそ，「文学テクスト」を介して，「私」たちが「他者の記憶」に接近していくための回路が準備されているように思われる．

しかし，この点に踏み入る前に，まずは，その物語の内容を要約しておこう．

【ストーリー】

舞台はコザの町．時代は1990年代の後半と見られる．

二人の視点人物が登場する．一人は，金城という30代半ばの塾講師．もう一人は，40代半ばと思われるバーの経営者，友利である．作品は，金城のエピソードから，友利のエピソードへとリレーされる形で進行していく．

① 金城のエピソード：伝令兵との出会い

金城が町の中をジョギングしていると，車に乗った数名の米兵に「女と

やれる所はないか」と声をかけられる．金城は「三ヶ月前，北部のある町で，小学生の少女が三名の米兵に車で連れ去られ，暴行を受けるというという事件」があったことを思い出し，不快感を覚え，無視して通り過ぎようとする．しかし，なおもしつこくつきまとう車に，思わず足蹴を食らわせ，出てこようとした兵士に手を出してしまう．

逆上した兵士たちに追われた金城は走って逃げる．あやうくつかまりそうになった時に，何者かに後ろから抱きかかえられ，自動販売機の陰に引き込まれる．するとその姿は，米兵の目には見えなくなってしまう．やがて，追跡を諦めた兵士たちが遠ざかっていく．金城が，ふりかえってみると，旧日本軍の軍服を着た，少年のような体つきの人影が立っている．しかし，その兵士の体には「首がない」．

金城を救ったその首なしの兵士は，敬礼をし，回れ右をして，腰に手をあてて走り去っていく．

② 金城の友利への語り

行きつけのバーで，その経営者である友利に，金城は出来事のあらましを語る．日本兵の格好をした首のない少年に助けられたことを告げると，それは「伝令兵」だと友利が教える．「沖縄戦」のさなか，「鉄血勤皇隊」の一員として「伝令兵」となった少年が，艦砲の破片にやられて戦死した．首をなくしたその「伝令兵」の幽霊が，「まだ戦争が終わったことを知らない」まま「走り回っている」のであると．そして，友利は一枚の写真——1970年12月のコザ暴動の時に撮られた写真——を見せる．そこには，炎上した車を囲む群衆に混じって，首のない男が写っている．「戦争が終わったのも，自分が死んだのも知らないんでしょうね．でも，その伝令兵は今も何を伝えようとしているんですかね」ともう一人の客（「大城」）が問う．「そんなの誰もわからんさ」と友利は不快そうに答える．

③ 友利の回想

友利は父親のことを思い出す．写真を趣味にしていた父は，コザ暴動の

際にカメラをもち出して写真を撮る．そこに，「首なしの伝令兵」が写っていたのだった．

父親は，戦時中，鉄血勤皇隊の一員として日本軍の元で働いていた．その仲間の一人に，幼馴染でもあった伊集（いじゅ）がいた．伊集はある日，伝令に出たまま戻らなくなる．艦砲射撃の降り注ぐ中，その身を案じて捜索に出た友利の父親は，首のない伝令兵の死体を見いだす．

写真に現れた首のない兵士を伊集であると信じた父親は，その後，夜毎にカメラをもって町を徘徊するようになる．これを契機に，家族関係が崩れ始め，息子である友利の生活もまた荒れていく．

しかし，父の始めた飲み屋を引き継ぎ，これをバーに改造して主となった友利は，結婚し，娘を得て，生活の安定を回復していく．ところが，このまま平穏な日常をすごせると思った矢先に，「無免許で乗り回していた高校生のバイク」にはねられ，娘は死んでしまう．これをきっかけに，友利と妻との関係が壊れ，やがて別居にいたる．

④　友利のエピソード：伝令兵との出会い

コンビニで見つけたインスタントカメラをもって町に出た友利は，金城が伝令兵に出会った自動販売機を探し当て，シャッターを切る．そこに，死んだ娘の姿が一瞬現れ，そして消える．夢中でシャッターを切りながら，「もうすべてが遅いのだ」とつぶやく友利．彼は高台の公園に上り，自分のベルトで首を吊ろうとする．しかし，何者かに助けられる．ふりかえると，首のない少年兵の姿がある．敬礼をした少年は，すぐにきびすを返して，どこかに走り去る．声をかみ殺して，友利は嗚咽をもらす．

4.　状況の寓意としての「伝令兵」――ひとつの政治的読解の可能性

文学テクストとは，解釈をうながし，これを可能にする装置である．「私」たちは，テクストの仕掛けに導かれて，「読む」主体となることを要

求される.

『伝令兵』においては，読み手の積極的な意味付与をうながす明確な形象が，作品の中心に置かれている．言うまでもなく，それは「首のない兵士の幽霊」である．作品が，その細部の記述においても，抑制された文体においても，終始「リアリズム」の規範に則って書かれていればこそ，その世界に登場する「亡霊」の存在は，きわだった文学的形象として読者の目をひきつける．まずはその仕掛けに乗って，「首なしの伝令兵とは何を意味するのか」を考えることが「読者」の役割となる.

では，その解釈はいかなる形で可能になるのか.

この作品には，読み手の解釈を方向づける文脈がやはり明確に描き出されている．それは，「暴力の連鎖する場所」としての「沖縄」である.

沖縄戦．単純に米軍による戦闘行為の暴力だけではなく，少年たちを「死」へと動員する体制の暴力．その犠牲者としての伊集という伝令兵(首のない死体).

戦後の米軍統治．その中で進められる土地収用と，米兵による暴力の反復．ベトナムへの発進基地としての「沖縄」．帰還兵の荒み．そして，その暴力に対する暴力的抵抗としての「コザ暴動」.

戦場の記憶を抱えて荒んでいく「友利の父親」．その結果として荒んでいく「友利の家族生活」．暴力の世代を超えた連鎖.

ここから立ち直ろうとした矢先の事故．それ自体は偶発的な，しかし，構造的な荒みを背景とした暴力.

なおも反復する米軍による暴力（1995年に起きた暴行事件への言及).

そして最後に，友利の（未遂に終わる）自殺．自己へと向けられる暴力.

このすべてを，直接的な因果関係の中で語ることはできない（テクストもまたそのように語っているわけではない)．しかし，そこには構造的連鎖を読むことができる．この作品に描かれた世界では，次々と引き渡され

ていく暴力の中に「日常」がある．あるいは，「日常性」と「戦時性」があまりにも隣接し，日々の暮らしの中に暴力が常態化している．

では，こうした「文脈」を背景に置く時，この世界を，今もなお走り回っている「首のない兵士の亡霊」とは何であろうか．「私」たちはここから，いくつかの可能な「解釈」を呼び起こすことができる．

① 「日常＝戦場」を告げ知らせる者

「戦争が終わったことを知らない」まま走り続ける兵士．それは「戦争がまだ終わっていない」ことを知らせる「伝令兵」である．「戦争」は「日常」の中に継続している．そのことを，「兵士」の存在が告げている．

② 「声」を奪われた証言者

しかし，「首のない」少年は，「伝令兵」でありながら，もはや何も「語る」ことのできない存在である．それは「顔のない犠牲者」，「証言することのできない証言者」の喩でもある．その姿に，語ることのできないまま（語る言葉を奪われたまま）埋もれている記憶の回帰，あるいは「埋葬」されることなく「浮遊」する記憶の形象を見ることができる．

③ 「顔」を奪われた者としての「沖縄」

顔のない存在は，対面的な関係性を奪われた存在でもある．そこに見えていながら，「他者」として（「顔」をもって現れるものとして）まなざされることのない存在．そこに「沖縄」の政治的な位置を重ね見ることも，無理な解釈ではない．

④ 「絶望」の中で「生きよ」と告げる者

「伝令兵」は，暴力的な出来事の場面に登場し，その絶望的な状況の中にある人間たちを，ぎりぎりのところで救い出す．それは，連鎖的な暴力に侵される沖縄を体現しつつ，なおそこで「生き延びよ」という命令を伝える者でもある（この時，「伝令兵」の姿を，このメッセージを伝える「作家」に重ね合わせることも許されるだろう）．

特定された（歴史的・政治的）文脈との関係の中で，こうした幾重にも折り重なる「意味」を担う「寓意的記号」として，「首なしの兵士」を位置づけること．ここに，このテクストを読み解くひとつの筋道が開かれてくる．そして，この読解の地平において，テクストは「沖縄」をめぐる表象の係争の過程に自らを位置づけることになる．

第二次世界大戦の末期に「本土決戦」を回避するための「捨て石」として，激しい地上戦の舞台となって以来，米軍による統治を経て，施政権返還（本土「復帰」）後の今日にいたるまで，「沖縄」は終わることのない「戦時的な暴力」に晒されてきた．その現実を，『伝令兵』はまざまざと「私」たちに突きつける．「読者」は，この作品に仕掛けられた「寓意的形象」に誘導され，テクストを解釈することによって，暴力の連鎖の場としての「沖縄」を――「トロピカルリゾート」としての，あるいは「癒しの島」としての「沖縄イメージ」（多田 2004）に抗う形で――発見することになる．

この時点で，読み手は，テクストの指示する政治的な文脈から自由になることはできなくなるだろう．そして，語られている現実の「政治性」を認識するということは，少なくとも「私」にとっては，このテクストを読むという行為の政治的条件を受け入れることにつながる．その文脈を，すでに馴染みのものとなった呼び名に従って，「ポストコロニアル」と形容してもよい．

政治的な体制としての植民地統治が終焉したあとにも，その歴史が植え込んだ社会・文化的な装置が作動し，支配－従属の関係が再生産され続ける状況．これを問題として，文化的実践と表象を政治的な関係の中に位置づけながら，そこに状況を打破するための潜在的な可能性を明らかにしようとする営みを「ポストコロニアル批評」と呼ぶとすれば，『伝令兵』は確かに，同様の批評的身構えを要求するテクストとしてある．この時「私」たちは，沖縄において「戦場の記憶」を想起するという行為の文脈

依存性を認識すると同時に，この作品を介したコミュニケーションに，(狭義の文学性には回収できない）別様の賭け金が備わっていることを意識することになる．

『伝令兵』を読む者――「私」――は，テクストの発するこの政治的な呼びかけを無視することができない．「私」は，今その場所に生きている人の生に，あるいはその生の荒みに，戦場の記憶が（直接・間接に）働きかけざるをえない場所として「沖縄」を見いだす．と同時に，その痛みを継続させる政治的な諸関係の中に，この作品の読者もまた呼び込まれているのだということを知る．「首なしの兵士」の形象は，そうした認識の装置として機能している．

しかし，こうした「解釈」をテクストに対してほどこし，そこに「政治的な呼びかけ」を感じとればこそ，「私」は，その読解の地平の構成のされ方そのものにある種の苛立ちを感じる．それは，このテクストを読むことを通じて発見されるべき「沖縄」が，その経験の外に準備された政治的認識の枠組みにすっぽりと収まってしまうことへの苛立ちである．「文学作品」の読者である「私」は，他方において，次のような自問を禁じることができない．上述のような「支配と従属」の関係の中で『伝令兵』を読むという作業は，テクストの中にあらかじめ折り込みずみのコードを賦活させ，これを反復しているだけのことではないか．そして，もしその段階にとどまるのであれば，「批評的」であるかのように思える読解が，「閉じた意味生産のサーキット」にからめとられ，それはそれなりに「紋切り型」の「沖縄」を再生産してしまうのではないだろうか，と．

繰り返すならば，その「コード」にしたがって送り届けられる「政治的メッセージ」は，「私」にとって回避しがたいものとしてある．にもかかわらず，そのメッセージが，既存のコードにしたがって明確に分節化されているがゆえに，そして二値的な形で「読み手の立場性」を問うがゆえ

に，「私」は，（誤解をおそれずに言えば）ある種の「退屈さ」を覚えてしまう．そこからは，受け取ったはずのメッセージに応えるための回路を見いだすことができない．

しかし，『伝令兵』は，明示的な政治的文脈の中で読者に立場取得を迫るだけの作品なのかといえば，おそらくはそうではない．少なくとも「私」は，この作品が呼び起こす諸々のイメージの中に，上述の枠組みには収まらない，より不確定な意味作用を感じとっている．そして，「私」たちがこの作品にひきつけられ，立ち止まってしまうのは，この浮動的な印象ゆえのことなのだと，思い始めている．

そうであるとすれば，「私」の中に生じうる「解釈」を，あえて，上に述べた「読み」とは別様の言葉で外在化してみなければならない．それは決して，「政治的状況」を離れた純粋に「文学的」な読みの可能性があるということではなく，語られた物語について別様の「政治的」な読解の水準が開かれうる，ということである．

5. 作動する「機械」としての伝令兵——もうひとつの政治的読解の試み

例えば，「伝令兵」は「かわいい」という印象．ここからテクストを読み返してみることはできないだろうか．首もないのに，軍服に身を包み，腰に手をあてて黙々と走り続ける少年兵の姿は，少なくともユーモラスである．この沈鬱な現実を描く小説の中にあって，「伝令兵」は，わずかに読者の心をなごませるような，茶目っ気のあるキャラクターである．言い換えれば，「伝令兵」はある種の「笑い」を喚起する形象でもある

この「首なしの兵士の幽霊」の「おかしさ」の一端は，彼の身体の「こわばり」に由来している．「気をつけ」，「敬礼」，「腰に手をあてて」，「前進！」．その規律化された兵士の身体が，そのまま自動機械のように反復されている．そのこわばりによって呼び起こされるかすかな「笑い」が，

救いのないリアリズムの世界の緊迫感を，ふっとゆるめて通り過ぎる．その弛緩の快楽が『伝令兵』という作品を「楽しい」ものにしている．その印象を手繰り寄せていくと，その先には，また少し違う「解釈」の地平が開かれていく．

この時「伝令兵」は，状況から遊離してしまった存在，今この世界で生きる人々（「金城」や「友利」）の現実とは無関係に勝手に走り回っている「機械的な存在」であるようにも見えてくる．確かに彼は，たまたま暴力的な場面に遭遇すると，これに介入して，脅かされた生命を救い出してしまう．しかしそれは，政治的な判断にもとづくというより，底なしの善良さのようなもの，ともすれば滑稽なものにもなりかねない無垢なる意志によるものであるように思われる．

ある意味において，「伝令兵」は状況を超越した純真なる「救済者」，「悪」に侵され「苦しみ」に満ちた世界にどこからともなく到来する，「救済的な英雄」の一形態である．ところが，この救済者は，「命」を救い出しても，人々をその「悪」の世界に置き去りにしたまま，またくるりと振り向いてどこかへ走り去ってしまう．置き去りにされたものは，救いもなく，ただ嗚咽をもらすばかりである．そこには何の約束もない．かつて与えられた命令に従って走り回り，偶発的に姿を現す「英雄」．そうした「相貌」においてとらえる時，「伝令兵」は，「敵/味方」，「善/悪」のコードには収まらない「浮遊項」と化していくことだろう．

「私」たちはここで，カフカのテクストを「表現機械」の作動する場所として位置づけたドゥルーズとガタリの論考を思い起こすことができる．「表現機械」は意味世界を有機的に統一するコードとは無関係に，「隣接するもの」を次々につなげていってしまう．世界を統一的な観点から把握し，隠喩的な意味形象へと集約させるのではなく，「物」や「人」や「事件」や「実在そのもの」を，ただ並列し連結してしまう機械．象徴的・隠喩的解釈によって組織される「意味の織物」とは無関係に分節化されてい

く「実在的な鎖列」の露出．ドゥルーズとガタリは，こうした「機械的作動」において，一貫性をもった意味世界から絶えず逃れ続けるテクストに，脱領域化の力の発動を見いだそうとしていたのであった (Deleuze & Guattari 1975＝1978).

『伝令兵』は，そのひとつの位相において（あるいはその可能性において），こうしたカフカ的な手なずけがたさをそなえた作品でもある．黙々と「兵士」であり続ける「首のない少年」は，政治的なメッセージの伝達者である以前に，あるいはそれと同時に，「反—物語」的な存在（機械）でもある．それゆえに「伝令兵」は，「意味世界」の中に不用意な「空白」を穿つ．しかし，その「空白」こそ，この「物語的形象」が生き生きとした存在感を示す場所でもある．その収拾のつかない「機械的作動」ゆえに，「伝令兵」は「笑い」を呼び起こす．それは，カフカのそれと同様に，「きわめて陽気な笑いであり，同じ理由によって，よく理解されない笑いである」(ibid.: 82). この喜劇的な位相において，記憶の形象化としての「伝令兵」は，読み手の（生真面目な）政治的な姿勢をすり抜ける．彼は，合意可能な解釈を導く寓意ではなく，寓意から解釈を導くコードを宙吊りにする「撹乱的」な形象である．そしてここに，このテクストのもたらすひとつの「快楽」がある．

もちろん，その「喜劇的形象」もまた，ある種の政治的モメントの中から生まれてくるものだと言わねばならない．「私」たちは，ドゥルーズやガタリが，カフカの「笑い」を「マイナー文学」というカテゴリーに結びつけて論じていたことを想起しておこう．「少数民族が広く使われている言語を用いて創造する文学」(ibid.: 27). それゆえに，「言語があらゆる仕方で脱領域化の強力な要因の影響を受け」(ibid.: 27),「そのすべてが政治的」(ibid.: 28) なものと化している文学．そこでは，現実を分節化し，表象し，領有するための媒介である言葉が，他者の言語から借り受けられている．その言語的な条件が，分節化された意味秩序に回収されえない「異

物」の登場をうながしている.

したがって「私」たちは，この「機械的形象」の出現をもまた，「沖縄」とその地における書き手たちに課せられた言語的条件——それもまた「ポストコロニアル」と形容されうるものである——に結びつけて考えることができる.「私」たちはこの物語が「日本語」で書かれているということをすでに異様な事態として認識しなければならないのかもしれない．しかし，この「反—象徴的」存在としての「伝令兵」は，単純に「何者」かの代弁者として位置づけることはできない．それはただ，作動し，通り過ぎる，不定の，しかし具体的な何事かの痕跡なのである．言い換えれば，その形象は，既成のコードに準拠して何ものかを指示するような「寓意的記号」ではない．むしろそれは，W. ベンヤミンが「ドイツ悲劇」の解読の中で提起した意味での「アレゴリー」，すなわち象徴的秩序の裂け目から唐突に浮上し，現前してしまう，特定不能な過去の仮象である.

そして，「伝令兵」をこのように両義的な形象としてとらえてみると，「私」たちはそれが，読者を読みの経験へとさらに深く引き入れるツールとなっていることに気づく.

一方において，それは作品に物語としての律動感を与えている.「伝令兵」は，掌握された意味世界の秩序に抗して，これを揺り動かす何かとして作品世界に遍在する．それは，直接に姿を見せない場面でも，この世界のどこかを走り続けている何ものかとして存在感を示し続ける．閉じた現実の背後に，常にうごめいている実在的なるものの気配．これこそが，この小説世界に「物語」を起動させる.「私」たちは，その「何ものか」の浮上を，例えば，「閉塞」に対する「解放」の，「絶望」に対する「希望」の徴候として受け取ることもできる．だからこそ，作品の最後において「人々」が救いのない現実に取り残されたままであっても，その先にまだ「何事か」の到来が予感される.「伝令兵」は，未だ具体化されない「希

望」を運び来るものとして，この世界を「物語化」している．

しかし他方において，この「物語的形象」は，「作品世界」により強固な「現実感覚」を与えることにもなる．「私」たちは，「現実」と呼ばれているものが，明確に分節化された「意味秩序」に回収しきれない厚みをもって生きられていることを知っている．それゆえに，「虚構の物語」を受容する場合にも，個別の形象が「明確な意味」をもって限定的に把握されるだけでは，その「世界」は「リアリティ」を失うことになる．したがって逆に，特定のコードによって解読しきれない存在が書かれることによって，「虚構の世界」には，「現実の経験」に類した「厚み」が感受される．何らかの意味を担いつつ，その与えられた「意味」を超え出てしまう両義的な形象――「伝令兵」――は，その意味で「現実効果」を担う．

ただしそれは，単純に読者がテクストに騙され，「準拠幻想」に陥るというだけのことではない．むしろ「私」たちは，テクストのもたらす「効果」によって，そこに「現実」が指し示されているということを感受すればこそ，作品を，自律的で代替的な世界（虚構世界）以上の何かとして受け取り始める．この時テクストは，外部への参照関係をまったくもたない「自律的空間」でも，あらかじめ整除された認識の代替物でもない，「現実的な厚み」を備えた世界を構成する．その世界の了解を介して，読者は「他者の経験」への接近を（たとえ模擬的な形であろうとも）企てることになる．『伝令兵』というテクストは，「文学的」形象化を通じて，そうした企てを喚起する力を備えている．

6. 他者の記憶への回路――「幽霊話」としての『伝令兵』

かくして，「首なしの兵士」の形象は，この作品世界を物語的空間として自立させると同時に，これを介して現実を探し求めるという態度へと読み手を導き入れることになる．ここにもまた，テクストがその文学的質を獲得することによって，同時に，その外部にある経験的現実の媒体となる

という事態を見ることができる.

文学作品が，既成の現実認識の例示的表象（イラストレーション）にとどまる場合には，読者は，伝えられた現実を自己の経験の中に受容するための回路を，少なくともそのテクストのうちには見いだしえない．しかし，時としてテクストは，「私」たちを物語的空間へと呼び込みつつ，その先にいまだ認識されきっていない「現実」が浮かび上がることを予感させる．虚構の物語が，開かれた解釈の可能性へと読み手を誘い込むことで，たどり着くべき現実の所在を，読者の視野の先に開いていくのである.

しかしそうであるとすれば，この時点でもう一度，テクストの読みを通じて「私」たちがどこまで「他者の経験」,「他者の記憶」に接近しえたのかが問われなければならない.『伝令兵』を読むということの賭け金は，状況への政治的認識を獲得することだけでも，物語的快楽を享受することだけでもなく，同時に，そこに示されている現実と記憶の実相に「触れる」ことにある.「私」たちのここまでの「読み」は，その課題に応えるものとなりえているのだろうか.

ここまで私たちは，それを「状況の表象」と見るにせよ,「作動する機械」として受け取るにせよ,「首なしの伝令兵の亡霊」を，ひとつのフィギュールとして，つまりは他の何事かを指示または暗示する形象として見なしてきた．この時「伝令兵」は，それを直接に言い当てることができるかどうかを別としても，その背後にある現実の代理的な表象にすぎない．しかし，他者の経験に近づくためには，この「寓意」としての位置づけがすでに障壁となってしまう.「伝令兵」を修辞的記号や指標としてとらえる「私」の「文学的身構え」が，語られた「現実」からの「距離」を前提とし，これを固定する．それは語られるべき現実を，伝達しがたいもの，表象しがたいものとして幽閉するテクストの効果をなぞってしまう.

だからこそ「私」は，どこかでこの「解釈者」の身構えを放棄しなければならない．そして，テクストを読んでいく中ですでにそれを行ってい

る，とも感じている．修辞的記号の解読と同時に，「私」はどこかで，もっと素朴な「現実の受容」をなそうとしている．それは，記号的な解釈に先立つ「模倣（ミメーシス）」的な経験の了解，とでも呼べるだろうか．

この読み手の素朴（ナイーヴ）な経験の位相を浮上させるための実験として，あえてテクストに対する「文学的な身構え」を解除し，これを現実の経験の単純な報告として読むことを試みてはどうだろう．例えば，『伝令兵』をただの「幽霊話」として読むこと．「金城」や「友利」の話を，飲み屋のカウンターで聞いている誰かのように，現実の経験を報告している語りとして受け取ること．もちろんその場合にも，「私」はその話の真偽を疑うことができる．しかし同時にそこには，この話を「真に受けて」，実際に「幽霊」がその辺を走り回っているという「現実を語る」こともできる（作中の「飲み屋」にいた「大城」という男の態度はまさにそれである）．こうして，現実の他者の語る「幽霊話」を聞く時の身構えで，このテクストを読むことができたならば，「私」は彼らの生きている「記憶の集団（ミリュー）＝環境（エコー）」へと参入することができるかもしれない．

もちろん，そんなことができるのかとあらためて問われれば，「私」は容易に首肯することができない．「私」には，「伝令兵」の「幽霊」を見ることができないだろうし，「彼」に遭遇した「金城」や「友利」の経験を自明のものとして受け止めることもできない．そこにある「距離」は容易に解消しえない．しかし，そうであればこそ「私」は，この「幽霊話」が日常的な現実として報告され受容される世界のあり方を，「経験」の形としてイメージしてみなければならない．「私」は，他者の記憶を知るために，あらゆる機会をつかまえて——言葉を通じて，イメージを通じて，顔を見ることによって，物質的な痕跡を介して——想像し続ける．小説のテクストを「読む」という果てしない営みもまた，そのひとつの回路となるはずである．

テクスト

目取真俊　2004「伝令兵」,『群像』2004年10月号, 講談社

参考文献

Benjamin, Walter 1928 *Ursprung des deutschen Trauerspiels.*（浅井健次郎訳『ドイツ悲劇の根源』, ちくま学芸文庫, 1999年）

Dana, Catherine 1998 *Fiction pour mémoire*, L'Harmattan.

Deleuze, Gilles & Guattari, Félixe 1975 *Kafka, Pour une littérature mineur*, Les Éditions de Minuit.（宇波・岩田訳『カフカ　マイナー文学のために』, 法政大学出版局, 1978年）

Didi-Huberman, Georges 2003 *Images malgré tout*, Les Éditions de Minuit.（橋本一径訳『イメージ, それでもなお』, 平凡社, 2006年）

Dubois, Jacques 2000 *Les Romanciers du réel.* Seuil.（鈴木智之訳『現実を語る小説家たち』, 法政大学出版局, 2005年）

Eco, Umberto 1968 *Opera Aperta.*（篠原・和田訳『開かれた作品』, 青土社, 1997年）

Genette, Gérard 1991 *Fiction et diction*, Seuil.（和泉・尾河訳『フィクションとディクション』, 水声社, 2004年）

浜川　仁　2005「目取真俊の『水滴』－嘘物言いの真実―」,『うらそえ文藝』, 浦添市文化協会

川村　湊　2000『風を読む　水に書く　マイノリティ文学論』, 講談社

目取真俊　2005『沖縄「戦後」ゼロ年』（生活人新書150）, NHK出版

本橋哲也　2005『ポストコロニアリズム』（岩波新書928）, 岩波書店

仲程昌徳　1982『沖縄の戦記』（朝日新書208）, 朝日新聞社

野上　元　2006『戦争体験の社会学　「兵士」という文体』, 弘文堂

Nora, Pierre 1984 *Les Lieux de mémoire*, tom 1.（谷川・天野・上垣監訳『記憶の場所』第1巻, 岩波書店, 2002年）

岡　真理　2006『棗椰子の木陰で　第三世界フェミニズムと文学の力』, 青土社

新城郁夫　2003『沖縄文学という企て　葛藤する言語・身体・記憶』, インパクト出版会

鈴木智之　2001「寓話的悪意―目取真俊と沖縄戦の記憶―」,『社会志林』48(1), 法政大学社会学部

多田　治　2004『沖縄イメージの誕生　青い海のカルチュラルスタディーズ』, 東洋経済新報社